会話秩序(制度)のエスノメソドロジー研究①

椎 野 信 雄

Ethnomethodological Studies of Conversational Order (Institution)

Nobuo Shiino

It is clear that there was an intimate relationship between ethnomethodology and conversation analysis in the 1960's, but latter-day conversation analysis may or may not have much to do with ethnomethodology. In the 1960's H. Sacks, together with H. Garfinkel, was explicating "demonstrably rational properties of indexical expressions." Certainly conversation analysis investgates "indexical expressions" by describing recurrent sequential actions in conversation and specifying formal rules for generating their organizational features, but its purpose is to develop a grammar for conversation. However, Garfinkel's ethnomethodological program is to investigate "the uses of grammar" (the uses of language). The original purpose in ethnomethodological studies was not to construct a formal stucture of practical actions but to examine how formal structures are used in and as local courses of practical actions. Latter-day conversation analysis is not necessarily incompatible with ethnomethdological studies, but professionalized conversation analysis seems different from ethnomethdological studies in essential ways. This paper attempts to search for a possibility of ethnomethodological studies of social institutions by examining "professionalized" conversation analysis from the (postanalytic) ethnomethodological standpoint.

0．エスノメソドロジーと会話分析

エスノメソドロジーと会話分析は，明らかに，60年代には親密な関係があったが，現在の会話分析は，エスノメソドロジー（以下ＥＭ）と余り関係がないのかもしれないし，あるのかもしれない。60年代にサックスはガーフィンケルと，「インデックス的表現の例証可能に合理的な特性」を解明していたのである。確かに会話分析は，会話における回帰的な継起的行為を記述して，会話行為の編成的特性を生成するための形式的規則を特定することで，「インデックス的表現」を研究しているのであるが，その目的は，会話の文法を開発することになっているようだ。しかしながら，ガーフィンケルのＥＭ研究プログラムは，「文法の使用」（言語の使用）を探究するものであるはずだ。ＥＭ研究の目的は，実践的行為の形式構造を構築することではなく，どのように形式構造が，実践的行為の局所的過程において／として展開され使用されるのかを検討することであったはずだ。現在の会話分析は，必ずしもＥＭ研究と両立不能ではないが，専門化したＣＡは，主要な点で，ＥＭ研究と異なっているようだ。以下では，（ポスト分析的）ＥＭの立場②から，（専門化した）会話分析を検討することによって，制度のＥＭ研究の可能な方向を探求してみることにする。

1．分析的リサーチプログラム（形式的分析）としての会話分析（ＣＡ）

会話分析（ＣＡ）は，ＥＭから発展してきた最も一貫したリサーチプログラムである。60年代後半以降，会話分析の研究者たちは，専門的研究を着実に蓄積してきた。現在のＣＡは，非常に多様なものとなり，統一の方法論的規定に従っていると仮定することは不正確であろうが，サックス・シェグロフ・ジェファーソン（ＳＳＪ 1974）「会話におけるターン取得の組織化のための最も単純なシステム学」の提示した会話秩序（制度）の形式的モデルが，会話分析の範例（科学的研究のための基準）となっていると言ってよいだろう。この論文は，ルーチンの相互行為様式に関する諸研究を再検討して，会話における発話ターンの秩序だった運用を司る基本ルールを分節した会話モデルを提示したものである。この会話秩序（制度）への形式的アプローチは，多くのエスノメソドロジストに非常に影響があり，ターン取得装置はＥＭ研究のための基礎を確立したのである。

ＳＳＪは，会話というものを，発話のターン（順番）を取得する参与者の権利と義務を配分するための「発話交換制度（システム）」と定義した。そしてＳＳＪの会話モデルには，コンテクストから自由でかつコンテクストに敏感な装置を特定し記述することで，会話の「全く明白な諸事実」の（方法的）産出を説明しようとする意図がある。これは，会話の諸事実を説明するためのモデルなのである。こうした諸事実の中には，例えば，会話では話者の交替が生じるということ，主として一度に一人の人が話すということ，話者間の移行が途切れや重複もなく生じるということ，およびターンの順序・ターンのサイズ・会話の長さ・参与者の発言内容・ターンの相対的配分・会話の参与者の人数は固定したものでなく変化するということが，入っている。

この会話装置は，（ターンを話者に配分するための）二つの「部品（構成部分）」と一組の「ルール」から成っている。この二つの「部品」は，「ターン構築のユニット」と「ターン配分のテクニック」である。そしてあらゆる「ユニット」タイプの重要な特性に，「予測可能な完了」というものがある。つまりあらゆるユニットには，可能なユニット完了の地点，すなわち生起する前に予測可能である地点があるということである。また「ターン配分のテクニック」は，二つ

のタイプに分かれる。現在の話者が次の話者を選択するというテクニックと次の話者が自己選択するというテクニックである。この二つの「部品」は，ターン取得のための基本ルールの運用のための条件を付与している。言い換えれば，会話者たちが（ターンの）移行関連場に接近する時にはいつでも，ターン取得装置の運用サイクルを規定するルールが関与しており，そのような接点のいずれででもターン移行のための選択肢は，つぎのようなターン構築のテクニックによって規定されているのだ。

1．どんなターンに対しても，最初のターン構築ユニットの最初の移行関連場では，

a．仮に今までのところのターンが「現在の話者が次の話者を選択する」テクニックの使用を含むように構築されているならば，そのように選択された当事者が，次の話すターンを取得する権利を有し，かつそうする義務がある。すなわち，他の人にはそのような権利や義務はなく，（ターンの）移行がその場所で生じる。

b．仮に今までのところのターンが「現在の話者が次の話者を選択する」テクニックの使用を含まないように構築されているならば，次の話者資格のための自己選択が制度化されているかもしれない（がそうする必要はない）。すなわち，最初の開始者がターンの権利を獲得し，移行がその場所で生じる。

c．仮に今までのところのターンが「現在の話者が次の話者を選択する」テクニックの使用を含まないように構築されているならば，他の人が自己選択しない場合に，現在の話者が続けるかもしれないが，そうする必要はない。

2．仮に，最初のターン構築ユニットの最初の移行関連場で，１ａも１ｂも作動せず，かつ１ｃの規定に従って，現在の話者が続けたならば，ルール・セットａ—ｃが，次の移行関連場で，そして移行がもたらされるまでそれぞれの次の移行関連場で循環的に，再適用される。(p.704)

この会話のモデルは，順序的・階層的で閉鎖的なシステムであり，会話者の権利と義務を規定する規範的装置でもあり，話者と聴者のダブルコンティンジェンシーを表示する相互行為の社会システムである。このターン取得のモデルでは，会話の継続の権利を決定するメカニズムが二つ特定されている。つまり現在の話者による次の話者の指名（ルール１ａ）と先着順の自己選択（ルール１ｂと１ｃ）である。ターンの独占権は，目下のターン構築ユニットの続く間だけ有効である。このターン取得装置は，発言権の「きれいな」移行を保証するようにタイムアウトもなく作動するのである。そしてこのモデルによって，例えば「一度に一人の参与者が話す」という全く明白な事実が，説明されていくことになるのである。

このモデルではまた，二つの副次的システムが記述されている。「隣接ペア」の編成規程と，誤謬の「修復」のためのメカニズムである。「隣接ペア」には，呼びかけ—応答，質問—答え，招待—受諾／辞退，あいさつ—あいさつなどの，別々の話者によるペアとなる行為からなる諸ユニットが含まれている。隣接ペアの重要な特性は，隣接ペアを作り上げる二つの「ペア成分」の「条件つきのレリヴァンス（関連性）」である。例えば，最初のあいさつが「第一ペア部分」であり，応答のあいさつが「第二ペア部分」である。第一ペア部分と第二ペア部分には，条件つきのレリヴァンスがあるのだ。さらに「修復」のメカニズムのための一定の可能性が，ターン取得の基本エコノミーに組み込まれてもいる。

このモデルでは，ターン取得などの会話の制度構造が「メカニズム」として識別されている。

決定論的・官僚制的・機械論的な語法によって，言説の継起的な組み立てを配置する非人称の形式主義の「局所的処置のシステム」が記述されているが，このターン取得装置は，道徳的エコノミー（自然権の領野／古典的人間主義／リベラルなエートスの基礎）なのである。（社会的相互行為を編成する装置に固有の参与者として，自律した，道徳的に責任のある行為主体が仮定されているのだ。）ターン取得装置のエコノミーのルール・セットは，先着順という自由市場メカニズム（ルール１ａ）と，相対的に伝統的な財産（所有）権（ターンの所有権の譲渡）を組み合わせたものとなっている。このターン取得装置では，自律的なシステムによって規制された相対的に「自由な」処置様式が認められているのである。このことによって，規制・制約の比較的強い「発話交換制度」と，この「自由な」ターン取得装置（日常会話）の比較が行なわれることになる。

（ターンや選択肢が事前に配分されているような）発話交換制度は，この（日常）会話という規範的背景に照らして見ると，人為的に賦課された，非対称的な制限のあるコミュニケーション・システムのように見えるのだ。ＳＳＪは，会話の「事前に規定のない」特性が，会話制度の実定的な「事実」だと定義している。かくして，会話（のターン取得装置）を，ある種のマスター的発話交換制度だと概念化することによって，ある形式のトークを，（日常）会話という根本形式からの派生物だとみなすようなリサーチプログラムが設立されることになる。これが，いわゆる会話分析の「制度」研究（教室・法廷・演説・ニュースインタヴュー・診察などの「制度」的場面の研究）の出発点である。ＳＳＪは，会話を，発話交換制度の最も一般的な類型として定義しているので，この会話モデルはおそらく，もっと制限のある形式のトークを説明するモデルよりも，高度な水準の抽象化の産物なのである。こうした（日常の）会話の分析構造が，さまざまな相互行為活動の構造的基礎の供給源となっているのである。

２．会話分析の専門化（制度化）

こうした会話分析（ＣＡ）が分析的科学として専門化＝制度化した程度というものは，常用語を用いた成員の直感（的理解）と形式的・科学的分析（的洞察）の区別によって示されるだろう。成員の常用語的直感と研究者の専門的形式的洞察を区別することは，あらゆる分析的営為の必要な部分であり，専門的営為の妥当性を主張するための理由にもなると一般に言える。最近のＣＡは，自らの研究を，言語能力のある成員（言語使用者）が誰でも認知できるはずの言語（記述）の理解可能性の特性を解明するものだとは見なしていない。その代わりとして，二種類のテクニカルな言語能力が，階層関係の中で含意されているのである。すなわち会話において特定のテクニックを産出・認知する常用語の言語能力と，こうしたテクニックを同様の事例の集合に包摂する分析的な言語能力である。これに基づいて，言語の常用的習熟（日常会話の素朴な習熟）と分析的知識（専門的分析）の区別，およびトークの常用語的理解と，トークのシステムを記述する抽象的成分・ルール・反復的操作の分析的理解の区別が行なわれている。その上で専門的分析は，常識的（常用語的）直感よりも優位にあると見なされているのである。

この分析的な言語能力は，専門的な科学者集団（コミュニティ）の専門分化した実践活動に根拠があることになる。専門的分析における観察言語やロー・データの反復や検証は，もはや「誰に」でも開放されているわけではないのだ。認識コミュニティに参加する資格は，会話分析の公認の実践者に限定されている。記述の流布は，テクニカルに専門的に媒介されたものとなる。テクストや録音テープの流布によって，会話分析の研究集団（コミュニティ）が統合されており，

その知見が根拠づけられるのだ。こうした過程において，自然に生起する経験的資料にしっかりと基づいた「分析的文化」が発展してきた。いわば分析的「直感」というものが，こうした専門分化した「分析的文化」の中で養成されているのである。

会話分析コミュニティが，一貫性のある「分析的文化」であるならば，このように専門化した会話分析は，実証主義的（または論理的経験主義的）学問分野となる。このように言うことは，会話分析の経験的知見が誤っていると指摘しているわけではない。ここでは会話分析の論理経験主義方向と，エスノメソドロジー的方向の問題提起的な関係を検討したいだけなのである。そもそもＥＭ的会話分析にとって，（分析）方法とは，（一般の）他者もその方法を再生できるような仕方で日常言語で記述できるものではなかったのか。

（専門化した）会話分析者は，会話分析コミュニティの成員の分析的言語能力と，日常会話者の常用語的言語能力を区別することによって，自らの専門的報告と，記述の対象である共同の実践活動（会話）を差別化してきた。専門的分析と素人的直感の分離は，分析的文化の発展の産物なのである。（分析）方法の説明の重要な特性とは，その方法の説明が，それを創作し使用する実践者（＝科学者）のコミュニティに内在的なものであるということである。コミュニティの成員の言語能力の記述は，（コミュニティの）他の成員に理解可能なインストラクションとして提示されるのだ。（分析）方法の説明の経験的妥当性についての判断は，分析的文化の他の成員に留保されている。したがってコミュニティの他の成員（だけ）に，どのくらい専門的報告が，その記述対象である（会話の）データ集合を表象しているのかを「非直感的な」根拠に基づいて決定する権限が与えられているのである。

専門化したＣＡでは，録音した会話の事例の分析的価値は，素人的「直感」に対向して，確立されており，分析は，専門的に集められた同様の事例の集合を参照して，組織化されている。会話分析者は，会話の細部の「直感的」解明を通じてではなく，ＣＡの資料集成における他の事例との比較を通じて，会話の事例の観察可能な特性を分析している。つまり専門知識と「直感的」言語能力を区別することによって，分析的文化の成員は，日常の実践的行為に対する学問的アプローチを創造しようとしてきたのである。

会話分析者は，専門分化した設備・観察技法・分析言語を用いることによって，日常会話行為の再生産に暗に含まれている常用語的「分析」についての形式的記述を構築することができると言う。分析は，もちろん科学者や論理学者が行なっていることであるが，会話分析者にとって分析はまた，研究対象である（会話の）実践活動の遍在的特性でもあるのだ。ＣＡにとっては，会話の参与者はお互いのトークを分析しており，その日常のあるいは常用語的分析は，さまざまな話者が共同で会話を産出する秩序だった仕方に表示されている。分析は，会話データの科学的記述の中にはもちろん，会話データの中にもあると言われているが，社会科学者の分析的ワークと素人成員の分析的ワークの間に分業が成り立っている。つまり素人成員（会話者）は，科学者が形式的に記述するテクニックの素朴な習熟を表示するのである。

3．会話の常用語的カテゴリー

会話分析者は，会話が常用語を用いた達成として局所的に産出されており，また会話の「資料」が（普通の）日常的表現形式であるということを認知しているが，ターン取得装置を作り上げている部分やルールを，抽象的な専門用語を用いて記述している。例えば「質問」は，よくある言語現象を表す常用語であるが，ＣＡでは「質問」という常用語的カテゴリーは，（現在の話

者が次の話者を選択するという）「ターン配分のテクニック」のタイプ（抽象的専門用語）に包摂されて，さらには「隣接ペア」のための専門的特定化（ターン取得装置）の下で精緻化されるのである。

しかしながら，発話行為の常用語的カテゴリーを専門用語に再特定化することは，常用語的カテゴリーの局所的レリヴァンスと理解可能性（実際の会話の常用語的産出や直感的透明性という特性）を割り引くことにはならない。（専門用語による描写は，常用語的カテゴリーと同様に，正確ではないのだ。）確かに「隣接ペア」などの専門用語（カテゴリー）による形式的分析は，社会的活動について理にかなった説明を与えてくれるが，この「理にかなっているということ」は，「構築的分析」の実践活動に内在的なものである。専門的カテゴリー（分析的専門用語）に包摂された現象の「事例」の記述（アカウント）は，その現象の（単称的）「事例」の内生的産出（局所的に産出されたレリヴァンス）から離れているのである。

「質問」の常用語的理解（識別）は，それが使用される継起的コンテクストにリフレクシヴに（相互反映的に）結びつけられていることが分かる。ＣＡではこうした「質問」を会話分析的専門用語の下に包摂するのだ。この専門用語は，常用語的カテゴリーと混同されることはないだろう。だが，こうした専門用語は，会話データに関して検討されると，局所的に達成され，かつ常用語で叙述可能な活動のことを指示する語であることが明らかとなる。実際に，「隣接的」発話の厳格に偶有的で，認知可能に近隣的な編成は，専門的分析のための「証明基準」のみならず，コンテクストから自由な装置のコンテクストに敏感な運用のための証拠をも与えているのである。

さてここでＥＭ的会話分析であるならば，まずは例えば［トークのターンを取得すること］を行なう時に（あるいは［質問する］を行なう時に，つまり［定式化］を行なう時に）素人成員は何を行なっているのかについての問いが提起できるのである。この問いは，成員がお互いに話をする時に，ターン取得装置は何を行なっているのかを尋ねることではないのだ。会話において「専門用語」が何を行なっているのかという問いの前に，［定式化］を行なう時に，素人成員は何を行なっているのかについて問うはずなのである。

4．ポスト分析的エスノメソドロジーへ

以上で見てきたように専門化したＣＡは，ある種の「事実作成のメカニックス」を考案するのに成功したのだ。このメカニックスには，会話を録音・再生するという物質的技術，トークをコード化するためのトランスクリプション方式という著述的技術，分析的文化の成員たちの分析研究のための社会的技術などが含まれている。ＣＡは，論理経験主義的路線に暗黙に従っていくことによって，伝統的社会科学の一つになったのだ。研究のトピック・データ・トランスクリプション・分析などの妥当性は，ＣＡコミュニティへの参加者によって開発された研究実践活動を通じて，慣習的に確立されてきたのである。（このことは，ＣＡの科学的業績の質に何ら関係のないことである。）

ここで問題にしたいのは，専門化したＣＡにおいては，抽象的な方法規則（ルール）が，（会話の）普通の行為の局所的な「運用」についての妥当な説明（アカウント）として存立するようになったことである。（科学的）方法が会話文法のモデルになったのだ。人間の行動（会話）を説明する方法とは，人間の行動を産出するための方法についての説明を産出することによるということである。ここで，常用語的活動を産出するための方法についてのＣＡ的説明（アカウント）というものの科学的妥当性を確立するための正当な根拠が求められたのだ。かくして，

（ターン取得の規則の記述のような）方法の形式的記述が，日常的活動の規則性・再生可能性に根拠を与えるものだと主張されているのである。

だが，エスノメソドロジーの方針では，こうした形式的記述は，それの記述する・教示する実践活動に内在するものではなかったのか。実のところＥＭでは，こうした形式的記述は，それが使用される（方法的）実践活動を「説明」するものではないのだ。それは，こうした実践活動そのものの言語能力的遂行において，その実践活動の中で使用されているのだ。ＣＡの見出した諸事実やルールは，会話を説明するためのモデルなどではなく，ある事象（トーク）を（「独白」や「講義」などではなく）まさに「会話」として識別するための基準として会話者に使用されているのである。諸事実の記述は，こうした諸事実を再産出するワークに照らしてみると，その妥当なインストラクションになっているのだ。（専門化したＣＡ研究は，ＥＭのアジェンダ（日常語の使用の解明）を廃棄したのだろうか。）

会話の（ポスト分析的）ＥＭ研究に必要なのは，「認識的」テーマ（「方法」・「分析」・「説明」・「規則」など）の局所的な再特定化を絶えず深化させることである。このようなリサーチプログラムのためには，「科学」（的方法）（説明の構造，形式的記述）を，根拠のある調査研究の源泉として扱うことを停止しなければならないのである。このプログラムの出発点は，（透明に理解可能で・直感的に明白だが，取消可能な）自然言語と実践行為のワーキングである。つまり言語能力のある素人成員（言語使用者）が誰でも認知できるような言語（記述）の理解可能性の特性である。これは，未調査の，正当な根拠のない「探究状況」を作るものである。こうしたワーキングのＥＭ研究の目標は，ある認識的テーマ（例えば科学的方法）を根拠に置くことではなく，いかにして認識的テーマが一組の特徴的な実践活動に実践的に状況づけられているかを例証することである。会話秩序（制度）のＥＭ研究プログラムは，科学的方法に準拠して会話分析を行なうことではなく，会話の記述が，いかにして会話秩序（制度）を相互反映的に局所的に産出しているかを解明するものである。

(Bibliography)

Atkinson, J.M. & Herritage, J. (eds). 1954. *Structures of Social Action,* Cambridge University Press.

Boden, D. & Zimmerman, D.H. (eds). 1991. *Talk & Social Structure : Studies in Ethnomethodology and Conversation Analysis,* Polity Press.

Button, G. & Lee, J.R.E. (eds). 1987. *Talk and Social Organization,* Multilingual Matters.

Coulter, J. 1983. "Contingent and a priori Structures in Sequential Analysis," *Human Studies* 6. pp. 361-74.

……(ed). 1990. *Ethonmethodological Sociology,* Edward Elgar.

Drew, P. & Heritage, J. (eds). 1992. *Talk At Work: Interaction in Institutional Settings,* Cambridge University Press.

Garfinkel, H. 1967 (1984). *Studies in Ethnomethodology,* Prentice-Hall (Polity).

……(ed). 1986. *Ethnomethodological Studies of Work,* Routledge & Kegan Paul.

Garfinkel, H. & Sacks, H. 1970. "On Formal Strudtures of Practical Actions, "in McKinney, J.C. & Tiryakian, E. (eds) *Theoretical Sociology: Perspective and Development,* Applenton-Century-Crofts. pp. 337-66.

Jefferson, G. (ed). 1989. *Havey Sacks — Lectures 1964-1965.* a special issue of *Human Studies* 12.

Heritage, J. 1984. *Garfinkel and Ethnomethodology,* Polity Press.

Livingston, E. 1987. *Making Sense of Ethnomethodology,* Routledge & Kegan Paul.

Lynch, Michael. 1993. *Scientific Practice and Ordinary Action: Ethnomethodology and Sccial Studies of Science,* Cambridge.

Psathas, G. (ed). 1979. *Everyday Language: Studies in Ethnomethodology,* Irvington Press.

Sacks, H. (Jefferson, G, (ed). 1992. *Lectures on Conversation,* Basil Blackwell.

Sacks H., Schegloff, E. & Jefferson, G. 1974. "A Simplest Systematics for the Organization of Turn-taking in Conversation, "*Language* 50. pp. 696-735.

Schegloff, E.A., Jefferson, G. & Sacks, H. 1977. "The Preference for Self-correction in the Organization of Repair in Conversation," *Language* 53. pp. 361-82.

椎野信雄　1994.「エスノメソドロジー研究の方針と方法について―ラディカルな秩序＊現象の再特定化―」『社会学評論』（Ⅴ.45,Ⅳ.2）pp.32-49.

…… 1996.「相互行為秩序はいかにして可能か」『社会学史研究』（Ⅳ.18）pp.39-49.

…… 1997.「E.リヴィングストンを読む―科学のエスノメソドロジーの理解のために―」『文教大学国際学部紀要』（Ⅳ.7）pp.27-43.

（注）

①本稿は，第45回関東社会学会大会の《テーマ部会(2)》4行為と認識「社会学基礎理論の現在―秩序・制度を問う―」（1997年6月15日，於明治学院大学（白金校舎）・本館1301教室）において『会話秩序（制度）のエスノメソドロジー研究』と題した報告をもとにしたものである。なお他の報告者は，吉田民人「事実的秩序と情報的秩序の相互循環――社会情報学（Socio-informatics）のアプローチ」と，盛山和夫「制度研究と相対主義」であった。

②この立場は，Lynch 1993に依拠している。